届け 世界の果てまでも

令和４年１２月１６日　Ｎｏ．５３　文責　校長　飯久保一男

地域を学び，地域から学ぶ

感染症対策のため延期する校外学習がありましたが，２学期の校外学習をすべて終えることができました。子どもたちが地域に出かけ，地域の姿や様子を直接見て学ぶことは，知識を広げ，深い学びにつながります。地域の学習について以前に保護者からこんなことを言われたことがあります。 ※小笠原小の話ではありません。

「この地域の出身ではないし，この地域に長くいるつもりもない。ウチの子も将来ここには住まない。

それなのに，この地域を学習することに意味があるのか。そんな学習にあまり時間をかけないでほしい。」

この保護者に，地域を学び，地域から学ぶことの意味を伝えましたが，納得してもらえたかどうか…。一言でいえば，「グローバルな世界で生きていくためのはじめの一歩が身近な地域」であるといえます。

本校の今年度の地域の学習のほんの一例です。

〇２年生は，１学期に町探検に出かけ，２学期には小笠原のお店探検をしました。子どもたちの興味のあるお店をきっかけに，地域で働く人々の様子を学びました。

〇３年生は，校区を探検し，市の施設や消防署などを見学しました。地域のため，人々のために働く人々について学びました。

〇４年生は生活に欠かせない水について学びました。毎日使っている水は，どこから，どうやってきているのか，排水はどうなっていくのか見学し，水不足が深刻だったこの地域に「徳島せぎ」がもたらした（もたらしている）恩恵などを学びました。

冒頭の保護者の言葉に戻ります。この保護者の話を言い換えると「小笠原出身ではないから，お店の見学をしても意味がない」「小笠原に長くいるつもりがないので，市役所や消防署を見学しても意味がない」「子どもが将来は小笠原に住まないから『徳島せぎ』のことを学んでもしょうがない」という理屈になってしまいます。

例えば将来，SDGs の学習などで，水不足で困っている地域，水の安全性が保たれていない国，下水処理ができていない国などに，どんな援助をしたらいいのか考えを出し合うことや，オンラインで実際にそういう国や地域の人と話をすること，さらに，これからの未来は水をどう管理して，水とどう付き合っていくべきかなどを考えることがあったとします。

そんなときに，本校で学習した子どもたちは，実際に見学した，地域の水についての知識や「徳島せぎ」についての知識を生かして考えることができるはずです。将来，小笠原に住んでいないとしても，本校で学んだ地域の学習が，様々な問題を解決する考えのバックボーンとなるのです。もちろん，別の地域の小学校で，その地域の学習をしたのであれば，それがその子のバックボーンとなるはずです。

身近な地域の学習から始まり，市の学習，都道府県の学習，日本の学習，世界の学習と系統的に積み重ねていくからこそ，グローバルな視点でものごとが考えられるようになります。そのために，１年生から６年生まで，そして小中一貫校として中学３年生まで，学習を計画しています。

また，積み重ねるだけではありません。４年生と一緒に「徳島せぎ」の学習をすると，私も初めて知ることがいくつもあります。大人が学ぶのに十分に値する内容です。４年生で学び終わる内容ではありません。５年生で日本の各地の学習をしたあとに，身近な地域はどうかと振り返ることで，また違った視点で学ぶことができます。６年生で日本の歴史を学ぶとさらに違う視点も生まれます。そして，大人になってから学び直すことで，さらに深い学びになります。子どもたちの学習は，国語でも算数でも，あらゆる学習において，学んだことを振り返りながら，少しずつ先に進んでいくものです。知識が増えることで理解はより深まります。

家を建てるためには，土を固め，基礎工事をすることから始まります。これがいい加減だったり手抜き工事だったりすれば，家が傾いてしまったり，地震などの災害によって倒壊してしまったりする原因になります。樹木は根をしっかり張らなければ，太く大きな木になれません。文字が書けなければ，作文は書けませんし，九九を覚えていなければ，複雑な計算はできません。これらのことと同じように，グローバルな世界で生きていくためには，まず，身近な地域を学び，地域から学ぶことが大切な基礎だと考えています。

〇櫛形地区は自然に恵まれています。５年生は自然との共生について学習しています。
〇４年生が学習したように，小笠原地区には水についての厳しく長い努力の歴史があります。
〇小笠原地区は商店街があり地域の中心として栄えてきました。
〇養蚕中心の農業から，果樹栽培に切り替わってきた農業の歴史もあります。
〇そして，少子高齢化の問題も抱えています。

その他にも，教材として学ぶ対象として十分応えてくれる，文化・伝統・歴史があります。地域を学ぶことで，地域の未来像が考えられます。それが，山梨県の未来や日本の未来を考えることにつながっていきます。日本はあらゆる面で世界の中で認められています。日本人が存在感を示すことも多くあります。グローバルな世界であっても，日本人であること，山梨県民であること，南アルプス市民であること，櫛形・小笠原出身であることを誇りに思い，地域や市や県や国を愛する「あやめっ子」を育てることが，櫛形中学校区の小中一貫教育の目標の一つです。

…いつもながら，脱線して終わりにします。私の思い出です。

〇私が高校生くらいまでは，小笠原の旧国道５２号線沿いは商店が軒を並べていました。
〇中ほどにスーパーマーケットが２店ありました。当時，小学校の「遠足」には，おやつを持っていくことができ，持っていけるおやつは□□円以内という上限がありました。遠足の前の日は，そのスーパーマーケットがおやつを買う小学生で混み合いました。

小笠原商店街（「小学校百年誌」より）

〇近所には肉屋や魚屋や八百屋があり，歩いて買い物に行きました。小学生のころ私はよく，魚屋におつかいに行きました。皿をもって魚屋に行き「お願いします」と皿を預けておくと，夕方には魚屋がその皿に刺身を盛りつけてくれてあり，受け取りに行きました。
〇巨摩高時代，白根や八田，増穂や鰍沢の連中が「帰りに小笠原に寄って行こうぜ」と小笠原の街をブラブラしていました。本屋，レコード店，楽器店，洋服屋，スポーツ用品店などが人気でした。
※当時，白根高校はまだありませんでした。
〇夏には久成寺の参道で「四六市（おしろくさん）」が催され，出店が並び，にぎわいました。

…本校ホームページ【学校長より】ページの下部に，私の思い出を含めた「校長のつぶやき」を掲載しています。